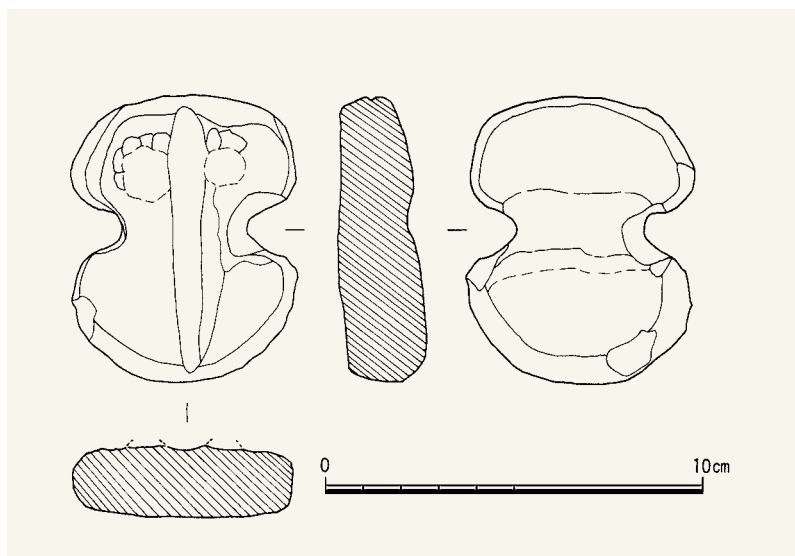


日野の土偶

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



日野谷寺町遺跡出土の土偶

私たちの住む京都は、桓武天皇の平安遷都以来およそ1200年の間、日本を代表する都市として、多くの人々が生活し、発展してきた。今日の京都を代表する様々な文化もその中で培われてきたものである。しかし、それ以前、人類誕生後何万年にもわたって、この京都の地にも連綿と人々の生活の跡が残されており、その多くは、いまだ地中に埋もれたままなのである。

1984年、伏見区日野谷寺町の中学校建設予定地（現在の市立春日丘中学校）で発掘調査を行なった。この周辺は、これまで遺跡として知られない地域であったが、試掘調査によって縄文・奈良時代を中心とした遺跡が存在することがわかり、新たに「日野谷寺町遺跡」と命名された。

京都市内の縄文時代の遺跡では、北白川追分町遺跡・北白川小倉町遺跡などの「北白川縄文遺跡群」が著名である。

考古学では、土器の編年や時期を示す単位として、しばしば遺跡名を用いるが、「北白川」の名は、「北白川下層式」・「北白川上層式」として、近畿地方の縄文時代の土器型式名に取り入れられている。

また、京都大学構内での発掘調査により、縄文時代の竪穴住居跡や配石遺構なども発見され、北白川扇状地における縄文時代の様相は次第に明らかになりつつある。

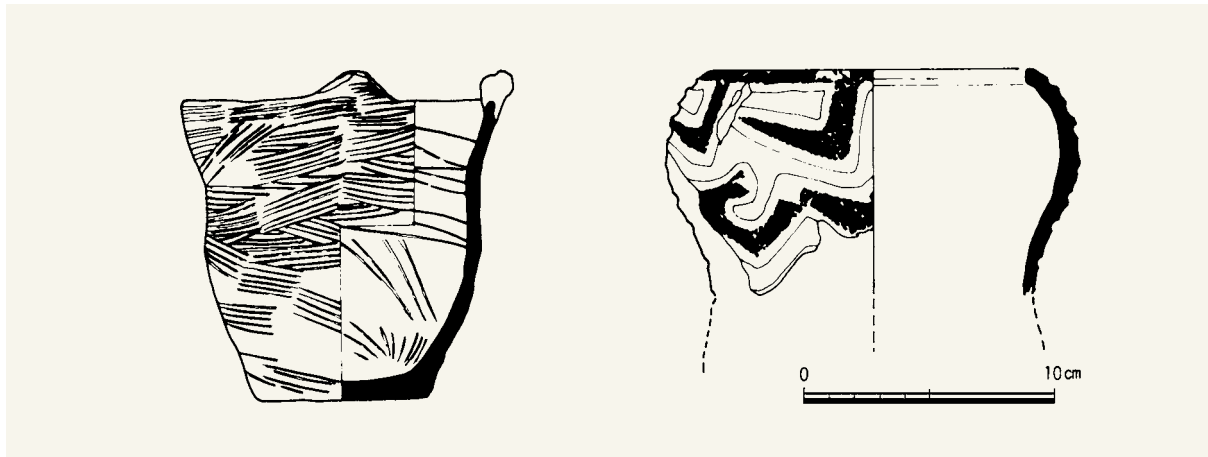
しかし、北白川遺跡群以外の大抵の縄文時代の遺跡では、新しい時代の堆積土層から土器・石器類が出土するだけであり、当時の様子を復原できる遺跡は少ない。そのことから日野谷寺町遺跡の発

見は貴重な資料の追加となった。

日野谷寺町遺跡は、山科盆地の南、醍醐山から天下峰にのびる山系の西側に広がる扇状地に立地する。

発掘調査で発見した縄文時代の遺跡には、炉跡や集石土壙などがある。炉跡は石で囲ったもので、本来竪穴住居にともなっていたと考えられるが、平面形など竪穴住居の全容はわからなかった。また、これらの遺構や包含層から多くの遺物が出土している。土器では甕・深鉢・浅鉢・注口土器など、石器では石鏃・叩石・石斧・石錘などがあるが、とりわけ注目すべき遺物に土偶がある。

この土偶は、「分銅形土偶」と呼ばれるもので、縦7.8cm、厚さ2.3cmの大きさである。頭部側面には一条の浅く細い溝があり、裏



日野谷寺町遺跡出土の縄文時代後期の土器

面の中央は浅く窪む。この土偶は素掘りの土壇から出土し、共に出土した土器は、磨消縄文手法を用いる「中津式」と呼ばれる土器で縄文時代後期初め頃のものである。

通常、土偶というと宇宙人のような「遮光器土偶」や「みみずく形土偶」などの装飾が豊かで立体的な土偶をイメージするが、ここで出土したものは、両側の中央がくびれる土板状の土偶である。この分銅形土偶は、愛知県から熊本県の西日本に分布し、斉一的な様相を示す。装飾の著しい土偶も神戸市篠原中町遺跡や大津市滋賀里遺跡などでの出土例がある。しかし、西日本では立体的な土偶であっても装飾を省略化したものが多い。また、西日本では東日本に比べ出土例が圧倒的に少なく、出土する時期も縄文時代後期と晩期が中心である。

土偶は縄文時代の初め頃から作られており、関東・東北地方を中心に発展した。象徴的に人体をかたどっているが、完全な形で見つかった例は少なく、体の一部を意識的に破損していることが多い。一説によると、土偶を故意に傷つ

けることによって、負傷・疾病などの災禍を転嫁しようとしたとも考えられている。また、胸部に盛り上がった乳房を表したり、腹部をふくらませて妊婦を表現したりしており、明らかに女性を示している例がほとんどである。女性は、生産・豊饒の象徴であり、地母神崇拝をあらわすものとも解釈されている。土偶の目的を限定することはできないが、このように宗教的・呪術的な目的に使用されたものと想像できる。

京都府下での土偶の発見は、現在までに日野谷寺町遺跡出土のものを含めて6遺跡7例がある。最後に、京都府下でこれまでに出土した土偶を概観しておこう。

大江町三河宮の下遺跡出土例は、立体的な土偶の頭部の破片である。眉と鼻を立体的に表し、目と口は線で表している。古墳時代の堅穴住居跡から出土しているが、時期は縄文時代中期と報告されている。

舞鶴市桑飼下遺跡から2例出土している。この土偶は、2点共に日野谷寺町遺跡出土の土偶と同じく、胴部のくびれる分銅形土偶である。縄文時代後期前半の縁帯文

土器を主体とする桑飼下式の時期と考えられている。

京都市左京区一乗寺向畑町遺跡からも出土している。土偶片は脚部の破片である。やや内股で太腿が太く、立体的な土偶である。縄文時代の遺構は発見されなかったが、新しい時代の土層より縄文時代後期の土器片と共に出土している。

京都市中京区高倉宮下層遺跡からも出土している。立体的な土偶の脚部で、足の指を表していると思われる刻み目がある。縄文時代の遺物包含層からの出土であり、時期は縄文時代最終末頃と報告されている。

長岡京市雲宮遺跡からは、土偶の頭部が出土している。右頬の部分を欠くが、大型で立体的に顔を表現している。縄文時代晩期に属するとみられる。

土偶は、縄文時代を代表する宗教的・呪術的な遺物である。今後、土偶の出土例がいよいよ増加すれば、私たちは、縄文時代の人々の豊かな精神世界について、さらに多くのことを知ることができるようになるであろう。